

## 独思録：「東京大空襲から思う」(3/15)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

東京大空襲が国民の大多数から忘れ去られようとしている中で、4大紙全てのコラムに取り上げられました。広島・長崎は国民の心の中に未来永劫残っていくことでしょうか、それに匹敵する死者のでた東京大空襲は忘れられてきています。

当時の一般国民の考えを代表しているようなエッセイを見付けました。

海野十三の『空襲下の日本』の中に「最後の勝利者 昭和×年十一月、焼土の上にて」という章があり、

「よくまあ、めぐりあえて、あたし……あたし……」

「うん、うん。お前もよく、無事で……」

灰になった家の前で二人は抱きあっていた。そこは嘗(かつ)て、彼等が平和な家庭生活を営んでいたその地点だった。

「なにも気にしないのがいい。損害は極(ご)く僅かだ。防空に対する国民の訓練が行き届いていれば、敵の空襲も敢(あ)えて怖れるに足らん。今度という今度、わが帝国空軍の強いことが始めてわかった。米国の太平洋爆撃隊は愚か、来襲した敵の空軍は全滅だ。あっちの主力艦はわが潜水艦に悉(ことごと)く撃沈されてしまうし、本国まで逃げてかえったのは巡洋艦くらいだろう。アクロンもメーコンも、飛行船という飛行船は、遂に飾りものに終わらしたい。愛国機や愛国高射砲を献納した国民は、勇敢に戦った精悍な帝国軍人と共に、永く永く讃(たた)えられるべきだ。わが帝都のこれくらいの損害や、一時米国の手に渡った千島群島くらい、大局から見れば何でもない。戦闘員にも非戦闘員にも同じく、神武天皇御東征当時からの崇高な大和魂が、今日もまだ宿っていたことがわかった。狼狽したり、悲鳴をあげたり、浅ましい策動などをするのは、本当の大和民族の血をうけついでいない連中のやる真似なんだ。」

と書かれています。

今からふり返ってみると、これが国民の大多数の気持だったのでしょうか。大本営発表以外の情報、特に日本不利な情報が、時の政府によって隠蔽されていた中では当たり前のことだったのかと思います。

昨日(3/14)皮肉にも東京大空襲を蒙った同じ週に、国会の承認もなく、自衛隊法に基づく海上警備行動での派遣命令を受け、広島県呉市の海上自衛隊呉基地から、両艦乗員のほか、特別警備隊の隊員や海上保安官ら計約400人を乗せた海上自衛隊の護衛艦「さざなみ」と「さみだれ」が、約1万2千キロ離れたソマリア沖のアデン湾に向けて出航しました。

海上警備行動での初の海外派遣で、警察活動に位置づけられていますが、自衛隊の海外任務で初めて武器使用に至る恐れもあります。

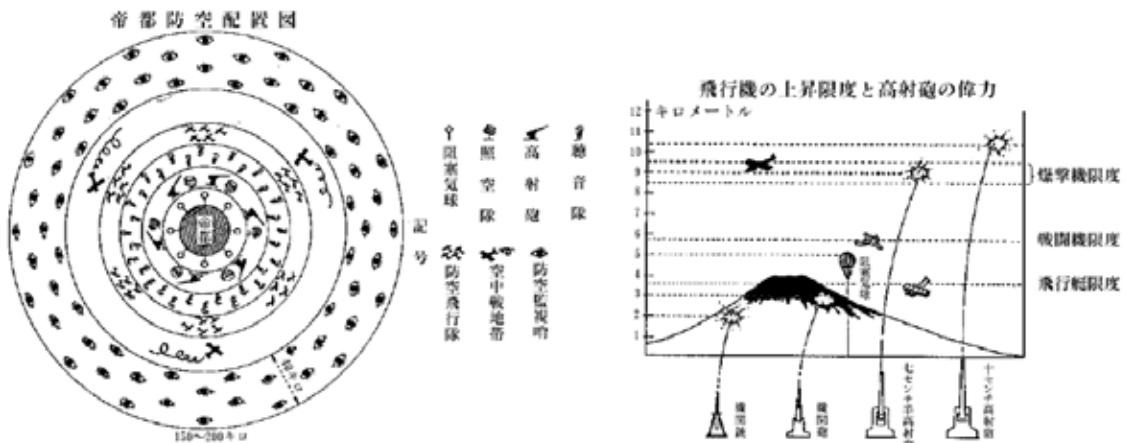
自国の船舶を守ることさえ躊躇し、他国任せにする国際的に無責任で、不正常的な状態が

ようやく解消に向かうと諸手を挙げて賛成する社説もみうけられますが、自衛隊の活動がなしくずしに拡大する可能性も高く、今後、禍根を残す結果にならないとも限りません。

法律面などの整理が遅れ、現行法による暫定措置の今回の派遣、自衛隊の行動にも極端な制限あり、他国の船舶も守ることもできないばかりか、自衛隊員の身の危険も大きいと聞きます。現行法による暫定措置派遣は、正に、政治怠慢による結果です。

国連海洋法条約は、すべての国が海賊行為の抑止に協力する義務を明記し、国連安全保障理事会決議も採択されています。他国と同等の国連海洋法条約を遵守した海賊対処法案の早期成立が待たれます。

「わが海上自衛隊のこれくらいの損害や、一時的に他国の船舶を見捨てるくらい、大局から見れば何でもない。自衛隊には、神武天皇御東征当時からの高貴な大和魂が、今日もまだ宿っていたことがわかった。批判したり、デモをするなど、浅ましい反対行動をするのは、本当の大和民族の血をうけついでいない連中のやる真似なんだ。」と政治家が思って、法律面などの整理は必要ない、現行法の無限の拡大解釈の方が政府には都合が良い、としているのではないと思いますが。如何なものでしょうか。



<海野十三 (1897-1949) >

小説家、SF 作家、推理作家、科学解説家。本名は佐野昌一。徳島市生まれ。早稲田大学理工科で電気工学を専攻。

日本 SF の始祖の一人と呼ばれる。

逓信省電気試験所に勤務しながら、1928 年、雑誌『新青年』に掲載された探偵小説「電気風呂の怪死事件」で本格的にデビュー。

シャーロック・ホームズをもじって名付けられたとされる帆村荘六を探偵役とする探偵小説の連作でも知られている。

太平洋戦争中には軍事科学小説を書き、海軍報道班員として従軍したが、敗戦に大きな衝撃を受ける。

終戦直後は、戦争責任を自ら取るという意味で海野十三名義の使用を一時取り止め、探偵小説や科学雑誌に科学解説記事を執筆、野球などの漫画や俳句や川柳を発表している。



作品に、『火星兵団』『地球要塞』『太平洋魔城』『浮かぶ飛行島』『海底大陸』『大空魔艦』などがある。

#### <東京大空襲>

太平洋戦争中、アメリカ軍により、東京は1944年11月14日以降106回の空襲を受けたが、「東京大空襲」と言った場合、特に規模が大きい1945年（昭和20年）3月10日に行われた空襲を指す。

太平洋戦争中に行われた空襲の中でも、とりわけ民間人に大きな被害を与えた空襲で、ジュネーブ条約違反の大量虐殺（ジェノサイド）であると指摘するものもいる。

警視庁の調査での被害規模は、死亡：8万3793人、負傷者：4万918人、被災者：100万8005人、被災家屋：26万8358戸であるが、死者数は遺体が早期に引き取られた者は含まれておらず、他に行方不明者も数万人規模で存在することから、実際にはより多い。民間団体や新聞社の調査では死亡・行方不明者は10万人以上とされている。



Before After  
空襲前(左)と空襲後(右)の航空写真



焦土とした東京

### 春秋：「東京大空襲」(3/10)

参拝の善男善女や外国人の観光客でにぎやかな東京・浅草寺の仲見世から本堂に向かうと、右手に警備派出所がありその前に縦、横、高さ1メートル余りの巨大な石が3つ鎮座している。1649年に徳川家光が寄進した“先代”仁王門の礎石だ。

18あった石のうち、1945年3月10日に門が焼け落ちた折の破損が軽かったもので、再建工事が始まった62年に掘り出した、と説明板にみえる。同じ焼夷(しょうい)弾爆撃によって、やはり家光が建て国宝だった本堂も五重塔も、みな焼失した。木肌に焦げ跡を抱く樹木が今も残る浅草寺は、東京大空襲の戦跡でもある。

地元の人たちによる空襲資料展が88年以来毎年、この日前後の数日間浅草公会堂で開かれている。今年は体験記などを加えた資料集の改訂版を出した。「浅草寺がめらめらと燃え続けていた」目撃談もあり、また、たくさんの人が、近くの言問(こととい)橋の上で焼死したり隅田川でおぼれ死んだりした様子が語られている。

展示された写真をじっと見る。松屋百貨店など数棟の建物以外一面の焼け野原になった街、炭になった遺体が折り重なる道……そういう光景を脳裏に焼き付け、公会堂から浅草寺へ4、5分の道を歩く。未明の闇を赤く照らした猛火の中を逃げ惑う人々の悲鳴を、真昼の雑踏の中で聞くような不思議な感覚があった。

<徳川家光(1604-1651)>

江戸幕府第三代将軍(在職1623-1651)。二代将軍秀忠の次男(嫡男)。母は浅井長政の娘で織田信長の姪お江。乳母は春日局(福)。

二代将軍秀忠の死後、寛永16年(1639年)に制度を改め、年寄り3人の担当を月番制とし、六人衆(若年寄の前身)をその補佐として置き、その後六人衆から老中、更に重要な事項のみ扱う大老を設けた。

また、目付と大目付を設置し、年寄達を通さずに直接将軍が情報を掌握できるようにするなど、幕府の諸役職は家光の時期に定まっている。

鎖国政策に関しては宣教師を工作員とした欧州各国の内政干渉と植民地化を排除し、日本の独立主権を保持することが本来の目的だったと言われている。



### 天声人語：「大空襲三一〇」(3/10)

今日で64年になる東京大空襲の日を前に、『大空襲三一〇人詩集』(コールサック社)という新刊を送っていただいた。頁(ページ)を繰ると、鎮魂、怒り、そして平和への祈りが一編一編からわき上がってくる。

東京だけでなく、空襲に遭った各地で書かれた詩が収録されている。中国の重慶、ロンドン、ガザもある。自ら逃げまどった詩人もいれば、想像力で紡いだ詩もある。空襲詩ばかりを集めた詩集は例がないそうだ。

追ってくる火 走る火 落下する火……たくさんの死をまたいで 逃げまどう / 走る 生きのびようと 走る 死ぬかもしれないけど走るしかないから そのときだった 道端に積みあげられた枯れ草が燃えて ヨシコが燃えた。(たかとう匡子(まさこ)「ヨシコ」)。作者は幼い妹を姫路で亡くした。

日本軍も中国を爆撃した。文人の郭沫若(かくまつじゃく)は、死んだ母子を 骨と肉はコークスとなり、かたくくっついて引離せない。ああ、やさしい母の心は、永久に灰にはできないのだ。と怒りを込めて表した(上原淳道訳)。

詩集は、戦争と平和をめぐる言葉の空疎化にあらがってもいる。たとえば「戦争の悲惨さ」や「命の大切さ」と言う。便利なだけに手垢(てあか)にまみれ、もはや中身はからっぽの感が強い。うつろな言葉が封じる想像力を取り返したいという思いが、書中から伝わる。

収録した詩人「三一〇人」は3月10日にちなんだ。むごい言葉、つらい言葉にも、平和を希求する思いが透けている。それは64年前のきょう炎に巻かれた人々の、遠い遺言を聞くようでもある。

#### < 郭沫若 (1892-1978) >

中国の近代文学・歴史学の先駆者。四川省楽山県出身。

1914年に日本へ留学し、九州大学医学部を卒業。在学時から文学活動に励み、1921年に上海で文学団体「創造社」の設立に参加。

その後、国民党に参加、蒋介石と対立し中国共産党に加入。蒋介石に追われ、1928年日本へ亡命。中国史の研究に没頭。1937年に日中戦争が勃発すると帰国し国民政府に参加。

戦後は中華人民共和国に参画して政務院副総理、中国科学院院長に就任。1950年全国文学芸術連合会主席、1954年全人代常務副委員長。1958年共産党に入党。1963年中日友好協会名誉会長。文学・史学の指導に努める。



### よみうり寸評：「平和の語り部」(3/10)

平和の語り部 高木敏子さんにはぴったりの呼び名だ。名作「ガラスのうさぎ」を残しただけでも、十分その名に値する。

「うさぎ」は240万部にも上る大ロングセラー、9か国語に翻訳もされた。が、その上、出版以来、全国各地を回り、1300回もの講演を行ってきた。

その高木さんの軌跡をまとめた「ガラスのうさぎ・未来への伝言」(笠原良郎編著)が金の星社の創業90周年記念出版として刊行された。DVDつきで高木さんの話が映像とともに聞ける。

きょうは、1945年(昭和20年)の東京大空襲から64年の3月10日。あの日の猛爆撃で、高木さんは母と2人の妹を失った。ご本人は神奈川県二宮に疎開中。

それで家族の生死が分かれた。非運は続く。終戦のわずか10日前、高木さんを迎えに来た父が二宮で米軍機の機銃掃射を受け死亡。12歳の少女には苛酷(かこく)に過ぎる。

「戦争を起こそうとするのは人の心、起こさせないとするのも人の心です」少女はけなげに戦後を生き抜き、語り続けてきた。

<高木敏子(1932-)>

童話作家。東京府本所区(現・東京都墨田区)に生まれ。文化学院卒業。処女作「ガラスのうさぎ」で、1978年に厚生省児童福祉文化奨励賞、1979年に日本ジャーナリスト会議奨励賞を受賞。2005年エイボン女性大賞を受賞。



日本が再び戦争への道を歩み始めているのではないかと危惧する立場から、1986年に『もういや「お国のために」には ガラスのうさぎを溶かさないうで』を岩波書店から上梓(岩波ブックレット)。

戦争体験を語る講演を続けて来たが、寄る年波から、2007年8月発表の『ラストメッセージ ガラスのうさぎとともに生きて』(メディアパル)を以って活動終了。

### 発信箱：「悼む場所（生活報道センター）」(3/11)

東京大空襲から64年を迎えた10日朝。東京都慰霊堂（墨田区）脇の特設テントで、都職員がパソコンのキーをたたいていた。遺族の求めに応じ、肉親の名前が犠牲者名簿の何巻にあるかを検索するサービスという。

大空襲ではほとんどの遺骨が身元も分からず、関東大震災の犠牲者と共にここに安置されている。都は10年前から遺族の申請を受けて名簿を作成。半紙に墨書きした名前を34巻に製本し、祈念碑の奥に納めている。

法要の日は碑の扉が開く。でもガラスケース内に並ぶ34巻の表紙を見ることしかできない。都は「追悼目的で集めたので、氏名は公表しない」というが、高齢になった遺族らが表紙に手を合わせる姿は悲しい。

沖縄の「平和の礎（いしじ）」。大阪の「刻（とき）の庭」。ともに戦争犠牲者の名を刻み、世に伝える場所だ。遺族は指で名をなぞり、若者は数字では分からない戦争を感じる。「うらやましい。なぜか東京の平和運動は頓挫してしまう」。父と姉を失った清岡美知子さん（85）はため息をつく。

清岡さんは焼死体の火で暖を取って一命を取り留め「生死紙一重の戦争で生き残った者の務め」と犠牲者を悼んできた。60年代、新聞投書で仲間を募り、遺族会を設立。だが仕事と家庭、活動の両立は難しく、会は消えた。90年代には他の仲間の訴えで平和祈念館構想が動き出すが、展示内容への政治的批判と財政難で凍結した。都は昨年度過去最高の税収を記録したものの、再検討の気配はない。

法要は天災と一緒に。名簿は非公開。資料の展示もままならない。10万の命に思いをはせて安らかに悼む場所が、なぜこの国の首都にはできないのだろう。

#### <清岡美知子（1923-）>

東京大空襲体験。東京大空襲の体験から、戦争とは何か、市民社会とは何かを共に考える「市民社会をつくるボランティアフォーラム」などに参加。

関東大震災後、避難先の長野県松本市で生まれ、浅草馬道で育つ。昭和15（1940）年府立上野忍ヶ丘女子商業卒。東京府（のちに都）就職。昭和20（1945）年3月10日の東京大空襲に会い、母を助けるも父と姉を失う。戦後、昭和21年都庁復帰、結婚退職。27年経済安定本部（のちの経済企画庁）就職。50年退職。

#### <ボランティアフォーラム>

現代社会が抱える様々な問題を、多くの市民、参加者が共有し、一緒に考えるためのイベントです。東京ボランティア・市民活動センターが主催。「福祉制度の崩壊から創造へ」「環境破壊と創造」「ボランティアリズム復活への道」「暮らしを見つめて」の4つのカテゴリーによって様々な分科会に分かれている。

